

「苦痛」への共感と英国奴隷貿易反対運動

—— Hannah More 作品に見る「同情」と「贖罪」の境界 ——

今 井 裕 美

I

Hester Piozzi は、知人に宛てた書簡の中で、奴隷貿易反対運動の趨勢を次のように表現している。

Well! I am really haunted by *black shadows*. Men of colour in the rank of gentlemen; a black Lady, cover'd with finery, in the Pit at the Opera, and tawny children playing in the Squares, — the gardens of the Squares I mean, — with their Nurses, afford ample proofs of Hannah More and Mr. Wilberforce's success towards breaking down the wall of separation. Oh! how it falls on every side! and spreads its tumbling ruins on the world! leaving all ranks, all customs, all colours, all religions *jumbled together*, ...¹

「なんとまあ！本当に私は黒い亡霊に取り付かれてしまっていること。色の黒い人たちがジェントルマンの身分だなんて。着飾った色黒の貴婦人がオペラ劇場の一階席にすわり、しかも黄褐色の子どもたちが広場で遊んでいて一私が行っているのは広場の庭ですよー乳母まで連れて。区分の壁をぶち壊そうとしているハナ・モアやウィルバーフォース氏らの試みがいかにうまくいっているかが十分にわかりますよ。ああ！その影響がどれほどあちこちにふりかかっていることでしょう！

そして世界のすみずみまで転げ落ちてゆくように荒廃が広がってきていることでしょう！おかげであらゆる身分も、習慣も、肌の色も宗教もみんなごちゃ混ぜになってしまっ…」（筆者訳）

これは、Piozzi こと前 Thrale 夫人が1802年6月にしたための書簡の文面である。彼女は Dr. Johnson と親しい間柄であったことで知られ、政治的信条としては反革新派である。彼女は、上記の私信の中で、世の価値観を覆す一大変化に対し、驚きと憤りを露わにしている。プライベートならではの率直さかもしれないが、これまでの正しき慣習への「破壊行為」に憤る姿勢は明確である。彼女は、この問題の核心を“the wall of separation” すなわち「物事を隔てる境界」に見出している。人種のみならず、階級も慣習も、そして宗教すらしかるべき区別を失いつつあるとし、「一切がない交ぜになった“jumbled together”」事態に恐怖しているのである。そして、この由々しき事態の根源が Hannah More や William Wilberforce らが推す奴隷貿易廃止運動にあると糾弾する。人道主義に基づく彼らの有難くない「善行」は、彼女にとっては身の破滅に他ならない。

その当時、人道的見地から奴隷貿易が問題視され始めていたが、先のような Piozzi 夫人の言及を指して、はたして博愛の精神や道徳心が欠けているというべきであろうか。あるいは、彼女が名指しする More や Wilberforce を社会秩序の破壊者と呼ぶべきなのだろうか。

奴隷貿易廃止に関するこの対立は、一見保守派と革新派のそれのように映る。しかし、「社会的政治的安定・平和・秩序は宗教的基盤があってこそ成立するという、強い信念を More は持っていた」と Robert Hole は断言する。²すなわち、宗教の意義は個人の欲望や身勝手を抑制することであり、More 自身それなくしては社会の秩序はありえないとの考えを有していた。このような信条は、political theology（政治神学）とも称され、人間を罪深い存在と位置づけるカトリック教的な人間観に基づく。すべての「地位」は神の思し召しにより定められ、原罪の宿命を負う人間なればこそ、その秩序に逆らうことは認められない。このような世界観が、英国国教会、福音主義者、そしてメソヂストらの思考を支配していた。ゆえにこれらの宗派では、摂理として「従属の宿命を負う者」を人的に「救済」することは、神の意図に反することにもなる。この点は、当時隆盛を極めていた急進派や

理神論派、ユニタリアンらとは見解を異にする。万民を平等に救う普遍的な慈悲ではなく、「存在の鎖」を忠実に守ることが優先される。神の御前における平等はあくまで垂直序列型であって、一律に平面列挙するような平等とは一線を画す。

一般的に More や Wilberforce は、社会の不正を正すべく、平等と博愛の実現のために尽力した人物として評価されている。しかしながら、その方針は先のような秩序ある平等に基づくものである。従って、More が進める社会改革および教育活動は、摂理により定められた社会秩序の保持を意味し、神の意向に逆らう形での変革ではない。この点を鑑みるならば、More への Piozzi 夫人の非難は、誤解であると言わざるを得ない。だが同時に、この「誤解」は More の評価に関する興味深い分析の視座を提供する。すなわち、More の慈悲と善行に基づく社会改革は、第三者にその意図が正確に理解されない可能性があるということである。はたして More の業績の評価は、聖人のような善行としてなのか、あるいは社会運動家の欺瞞としてのものなのだろうか。

また、1780年代から一層機運の高まった奴隷貿易廃止運動は、人道主義という一枚岩の方針で動いていたのではなく、もっと複雑な思想が関連していたことがうかがわれる。きわめて保守的な世界観に裏付けられた行動は一見革新的であるが、その本質は必ずしも革命的な破壊性に裏付けられているわけではない。また、弱者救済の行為は純粋な「善行」であるとは限らず、その政治性を問う必要がある。慈善には偽善がつきまとい、人々への啓蒙活動が政治的支配の手段となり得ることを忘れてはいけない。

そこで本稿では、1780年代末から盛んになった英国の奴隷貿易廃止運動にかかわる anti-slavery poems を取り上げ、それらの作品分析を通じて「慈善」の本質を道徳哲学的に探ることとする。特に William Cowper の作品や Hannah More の代表的反奴隷貿易作品、*The Sorrow of Yamba; or, the Negro Woman's Lamentation* (1795) の分析を中心に論じる。³また、More 作品を読み解く重要な鍵として、Jeremy Bentham の功利主義の観念を援用する。

II

はじめに、anti-slavery poems として扱われている代表的な作品を見てみる。以下は、神経衰弱のために狂人として最期を迎えることになった詩人 William Cowper (1731-1800)

の *The Task* (1785) 第2巻の一部である。奴隷貿易をテーマにしたこの一節は、人間の非情さや身勝手さを糾弾しつつ、きわめて人道的な見解を示している。

He finds his fellow guilty of a skin	彼は同胞に罪を見出す、その肌が
Not coloured like his own, and having pow'r	自分と異なる故に、そして力をもって
T' enforce the wrong, for such a worthy cause	不条理を強要し、そんな価値ある理由のため
Dooms and devotes him as his lawful prey.	法の餌食として呪われた運命を負わせる。
Lands intersected by a narrow frith	狭い入り江で区切られた国々は互いを
Abhor each other. Mountains interposed	嫌悪する。大地に差し挟まれた山々は、
Make enemies of nations who had else	国々を敵同士にする、そうでなければ
Like kindred drops been mingled into one.	同類の雫の如く混じりあっていたものを。
Thus man devotes his brother, and destroys;	このように人は同胞を呪い、破滅させる。
And worse than all, and most to be deplored	そして何よりも酷く、最も非難されるべき
As human nature's broadest, foulest blot,	人間本性の最も露骨で穢れた汚点だが、
Chains him, and tasks him, and exacts his sweat	彼を鎖に繋ぎ、酷使し、鞭で汗を
With stripes that Mercy with a bleeding heart	搾り出させる、慈悲が真に悲しむ心で
Weeps when she sees inflected on a beast.	彼らを目にして涙する傍らで。
Then what is man? And what man seeing this,	一体人とは何か？この様を見る人間が
And having human feelings, does not blush	人の心を持つというなら、赤面し、
And hang his head to think himself a man?	人間であることを恥じないのだろうか？

(12-28)⁴

(筆者訳)

肌の色を理由に同胞を奴隷に貶める奴隷貿易は、人間本性の中でも「最も穢らわしい汚点」であると Cowper は断ずる。また、人間への残虐行為を目の当たりにしても恥じることのない英国国民には、人間としての本性を疑うと非難している。

しかし、Cowper の憤りはそれだけにとどまらず、ついには「奴隷」の境遇に同化し、「むしろ私自身を奴隷の身とし、自ら手枷足枷をつけよう、彼らにつけさせるくらいならば」
 “I had much rather be myself the slave, / And wear the bonds, than fasten them on him.” (35-36)

と宣言する。そしてその思い入れは、「国内に奴隷はいない—ならばなぜ国外にはいるのか？」‘We have no slave at home. —Then why abroad?’ (37) という根源的な問いへと向かう。この言及は、英国にとっての誇りが今や否定しがたいスティグマであることを突いている。すなわち、奴隷不在の国という「誇り」は、海外における奴隷たちの不可欠な存在を逆照射し、奴隷貿易に依存する国の体質を浮かび上がらせる。

6巻全5千行にもおよぶ大作 *The Task* で Cowper が語るのは、墮落した都会の生活ではなく、自然とともにある田舎暮らしの賞賛である。ただし単なる自然回帰ではなく、搾取や非人道性に溢れる経済活動や労働者や貧民の窮状を問題視する、批判的視点を有している。また、奴隷貿易の非道さにも批判の目を向ける Cowper は、十分に政治的な意図を持っていたと言える。

例えば、奴隷商人の悔恨を描く次の作品においても、その傾向は明らかである。‘Sweet Meat has Sour Sauce, Or The Slave-Trader in the Dumps’ (1788) とは、奴隷貿易にかつて携わっていた者の後悔と嘆きをモチーフとした作品である。anti-slavery poems の典型的なパターンをとる作品としても有名である。なお、この作品の背景には、Cowper 自身の事情が深くかかわる。彼は、精神的な脆弱さのために頻繁に憂鬱症を発症し、他人の助けを大いに必要とする生活を送っていた。その困難な人生を支えてくれたのが、奴隷貿易にも縁の深い John Newton であり、彼から大いに人道主義の洗礼を受けた。その証左ともなるのがこの作品であり、その筆は奴隷たちの苦痛を生々しく再現する。

When a Negro his head from his victuals withdraws
And clenches his teeth and thrusts out his paws,
Here's a notable engine to open his jaws,

Which nobody [can deny, deny], &c

25

[Which nobody can deny].⁵

Thus going to market, we kindly prepare
A pretty black cargo of African ware,
For what they must meet with when they get there

Which nobody, &c.

'T would do your heart good to see 'em below

30

Lie flat on their backs all the way as we go,

Like sprats on a gridiron, scores in a row,

Which nobody, &c.⁶

奴隷商人であった語り手が自ら関わってきた非道を顧みるが、そこで語られる奴隷の実態は悲惨の一言に尽きる。特に、奴隷の「身体」への仕打ちは残酷である。奴隷たちはアフリカ現地で「調達」され、「荷物」として積み込まれる。逃亡防止のため、奴隷たちの手足は鎖につながれ、完全に自由を奪われる。魚の如く船倉に並べられた身体は、もはや人身とは言えない。

しかし、奴隷の身体への非情な仕打ちはこれだけにとどまらない。労働力としての品質維持のために食物は供給されるが、そこに人道的配慮は一切ない。むしろ奴隷たちにとっては、食事を断って餓死を選ぶことが抵抗のひとつの形であると認識されていたようである。だが、食事を拒否する者がいたとしても、買主たちはそのような反抗を許さない。“Here’s a notable engine to open his jaws (24)”とあるように、彼らの口をこじ開ける道具が考案され、無理やりに食べ物流し込まれた。奴隷たちの食欲までが非人道的に管理されていたのである。

このように提示される虐待の描写により、読む者にもその「苦痛」が再現されるかのようである。しかし、この作品の本来の目的は、語り手自らの贖罪にある。そこで注目すべきは、この作品の最大の特徴である、各スタンザの末尾のリフレインである。悔恨と贖罪を込めて描写される非道は、呪詛のように反復される「誰にも否定できやしない」というフレーズにより全く別な意味合いが付与される。それは「紛れもない事実である」ことを突きつけつつも、「誰もが無関係ではいられない」という不可避の状況をも物語る。話者のみはその咎を負う問題ではないとなれば、話者の贖罪の意図そのものが無効になってしまう。奴隷への酷い仕打ちの表象によって提示される罪は、いまや個人の慈悲や人道意識による贖いを超越し、奴隷貿易の存在自体の罪深さへと収斂する。すなわち、奴隷貿易が

もたらす非人道性はもはや「必要悪」であり、個人的な良心の呵責は社会システム自体の責任に取って代わられる。そして、奴隷たちの逆境は現実性を失い、単なる「不幸な逸話」へと還元されてしまうのである。

このような都合の良い責任所在の転移は、さらに語り手が行う懺悔の弁や贖罪の試みの中にも見られる。

But ah! if in vain I have studied an art
 So gainful to me, all boasting apart, 35
I think it will break my compassionate heart,
 Which nobody, &c.

For oh! how it enters my soul like an awl!
This pity, which some people self-pity call,
 Is sure the most heart-piercing pity of all, 40
 Which nobody, &c.

ここでは、人間の尊厳を著しく傷つける行為を反省した語り手が、今更ながらに奴隷たちに対する哀れみを提示している。かつては金儲けのために奴隷貿易に携わっていたが、今や自らの「同情深い心 compassionate heart」を砕き、どれほど「心を突き刺すような鋭い哀れみの心が、自らの魂を貫いていることか」とその悔悛の苦悩を語る。

しかしながらこの懺悔の言葉は、途中に挟み込まれた一言により、たちまちその脆さを露呈する。悔悛の果てに抱くようになった「哀れみ」に対し、「他人は自己憐憫と呼ぶのかもしれないが」と添えたその一言が、自らの「共感」の偽善性を暴露している。他人へ加えた危害に対する反省は、「他者」への哀れみではなく、自己保身としての「自己憐憫」から生じる。贖罪においては、「共感」を通じて他者の苦痛に寄り添い、そこで想定される苦痛の度合いに応じて贖いが量刑される。しかし、このプロセスが被害者のためではなく、自身の不首尾に対する不満となった瞬間、謝罪や贖いの意図は消失する。

他者の苦痛への真の共感なくしては、罪を償う行為ですら自己保身へと変貌する。哀れ

みと自己憐憫の境界は、先にも指摘した「誰も否定できっこない」というリフレインが帯びる責任回避の様相とあいまって「必要悪」の必然性を招き入れる。このような意味で、Cowper のテキストが示唆する根源的な矛盾が、道徳や慈善の政治性を分析する上で重要な観点を提供してくれる。

ここで、「必要悪」と「社会悪」について少々見解を述べておく。「必要悪」というのは、善悪の二律背反的な価値観しか想定しない思考様式における、矛盾の表出である。勸善懲惡的思考が現実問題との折衝を経た結果、その理論的矛盾が一種の妥協点として登場する。いわば理論と実践、理想と現実の乖離であり、現実と観念の世界の双方の存在をアリアバイ的に証明するものでもある。なお、この状況を現実の社会問題のうちに想定するのが「社会悪」と呼ばれるものであろう。

また、「必要悪」は、個人と社会のあり方を問う際に、必然的に付随する問題でもある。すなわち、個人の欲望と社会集団の利益との相克の問題と言える。あるいは、個と集団とで異なる利害関係をいかに調和させるかという命題にも関わる。この両者が共時的に存在することはなく、常に妥協点にその解決を求めざるを得ない。例えばその好例が、Jeremy Bentham (1748-1832) の功利主義である。「最大多数の最大幸福」と称される彼の功利主義は、ともすれば非現実的な樂觀主義とみなされがちである。しかし、彼の理論の詳細に立ち入れば、その主張はそれほど単純なものではない。「社会悪」が噴出した英国の18世紀末から19世紀前半という時代を鑑みれば、奴隷貿易問題に限らず、労働者や貧困層の権利問題にも不可欠な視点であったと推測できる。

次章では、テキスト分析を交えながら、奴隷貿易反対にまつわる More の姿勢を考察する。

III

Hannah More (1745-1833) とは、Dr. Johnson に「英語において最も力強い作詩法の使い手」と言わしめた人物である。1745年に田舎町ブリストルに生まれ、父親は熱心に教育を施し、5人の娘たちを教師として自活させようと尽力した。その結果、四女であるハナ

は、ラテン語、イタリア語、スペイン語といった語学に才能を発揮した。若干4歳にして教理問答を暗誦した天才少女は、地元の聖職者を驚かせた。その才能の開花振りにとまどいながらも、父は彼女への教育を続けたという。

Moreの経歴は、大きく三つの段階に分かれる。有名なシェイクスピア俳優であったDavid Garrickとの出会いを機に、まずは劇作家としての名を馳せる。Garrickの演技に助けられてしばらくは作劇を続けるが、Garrick本人の死を境にその活動を停止した。

第二の段階では、Bluestockingsの中心人物であるElizabeth Montagueと出会い、Moreは教育を重視する社会活動家へと転身する。Bluestockingsとは、Montague夫人を中心とする、英国18世紀半ばにおける文学愛好家的なエリート集団である。保障された身分を背景に、高い教養と社会改革への理想を抱き、文筆を通して社会への提言を行っていた。とりわけ、彼女たちは教育の必要性に対する意識が高く、More自身も日曜学校の活動を活発化させて教育活動に専念した。

Moreの教育論の第一の特色は、地位向上の手段としての女子教育の必要性である。男性に比して二義的存在でしかなかった女性たちを、教育の力によって相応の地位に引き上げることを目的とした。また二つ目の特色は、教養が欠落した労働者階級への教育である。ただし、ひとつ留意すべき点がある。貧民教育の推進は社会全体の利益にかなうものであるが、同時に分不相応な向上心には抑制をかける必要がある。労働者にあっては行き過ぎた「自由」や「平等」は弊害をもたらすとして、Moreは教育の「適正利用」を提唱していたと言われる。この点においても、定められし場所での存在意義を重視し、必要以上の社会的階層の流動をMoreは想定してはいない。

そして、Moreの作家活動の最終段階は、時代の機運として高まりを見せていた奴隷貿易廃止運動推進派としてのものである。彼女の交際の輪には、当時熱心に奴隷貿易廃止運動を展開していたWilliam WilberforceやThomas Clarksonが含まれ、More自身も志を同じくした。詩作品においても、“Slavery, a Poem”(1788)を発表するなどして、積極性を見せていた。歴史的背景としては、Moreが親しく交流することになるWilliam Wilberforceが議会で初めて奴隷貿易廃止のスピーチをしたのが1789年であり、その後平民院へ初めて提案を行ったのが1791年であった。その時は不本意にも賛成票が反対票の2分の1にとどまり、偉大なる試みはまったくの惨敗に終わった。最終的にイギリス国内全面奴隷貿易

廃止案が通ったのは1833年のことであって、18世紀中には到底叶わぬ夢であった。

Hannah More には、庶民の教育を意図した著作が数多くあるが、最も部数多く読まれたのは、*Cheap Repository Tracts* 「廉価版叢書」であろう。*Cheap Repository* とは、貧民の精神的困窮および道徳心の欠落を憂い、More 自らが企画した貧民の教養教育の試みであった。More 本人や姉、友人たちが筆を執り、所得が低く教養のない庶民たちのために小冊子を出版したのである。装丁からして庶民的なスタイルをとり、教訓的説話をできるだけ多くの庶民に廉価で提供することを目指した。その売れ行きは非常によく、当時の出版ビジネスとしても大成功であった。

Cheap Repository Tracts は1795年から98年にかけて最も盛んに出版されたが、本稿では「Yambaの悲しみ—ある黒人女性の嘆き」*The Sorrow of Yamba; or, the Negro Woman's Lamentation* (1795) を主に取り上げる。その内容は、女性奴隷の苦境と絶望、そして再生の物語であり、キリスト教徒としての理想的贖罪の様子を描く作品となっている。キリスト教が持つ慈善の精神や布教の使命感がよく描かれているが、宗教的洗脳の要素も色濃く見られる。

主人公の女性奴隷 Yamba は、乳飲み子を含む子供たちと夫と、幸せにアフリカの地で暮らしていた。しかしある晩、Yamba は突然白人たちに拉致され、はるか遠くへと奴隷船によって連れ去られた。いわゆる、アフリカから西インド諸島へと向かう Middle Passage を航海させられた奴隷の物語である。Yamba は奴隷としての過酷な運命に絶望し、自殺を試みるが、英国人宣教師が説くキリスト教との出会いにより精神的再生を図る。

この作品には少なくとも二版が存在するが、本稿では、47スタンザから成る1795年版のテキストを使用する。まず、以下に全体の内容を簡単に示す。

- Stanza(1)～(3) 過酷な現状に絶望し、死を願うアフリカ人女性奴隷 Yamba
- Stanza(4)～(7) 平和に暮らしていたアフリカから拉致された際の詳細
- Stanza(8)～(14) 移動中の悲惨な環境と亡くなったわが子への思い
- Stanza(15)～(18) 現地到着後の人身売買の様子と深まる絶望
- Stanza(19)～(20) 逃亡・自殺の決意
- Stanza(21)～(23) 英国人宣教師との出会い、交流
- Stanza(24)～(26) 宣教師による救いの説教、キリスト教徒の宿命の伝授

- Stanza(27)～(33) 罪と贖罪への理解
 Stanza(34)～(35) 洗礼とキリスト教徒としての誓い
 Stanza(36)～(37) 死に対する新たな認識と決意
 Stanza(38)～(39) 新たな故郷への思い、そして最後の願い
 Stanza(40)～(42) 非情な奴隷貿易を行う英国への抗議
 Stanza(43)～(47) キリスト教徒として願う故郷への布教と家族の救済

上記のように、白人の横暴により被ることになった過酷な運命を描きつつ、英国人宣教師との出会いがいかに絶望的な境遇に救いをもたらしたかが述べられている。基本的には、虐げられたる者こそ神により救われることを論ず、教訓話の枠組みに基づく。当然ながら反奴隷貿易作品にふさわしく、悲惨を極める奴隷たちの状況については、相応の具体性をもって描かれている。「積荷」扱いの乗船状況、移動の体制、食事の問題、船長による虐待のさまなど、悪意ある白人たちの仕打ちが描かれる。

(8) Then for love of filthy Gold,
 Strait they bore me to the sea;
 Cramm'd me down a Slave-ship's hold,
 Where were Hundreds stow'd like me.

(9) Naked on the Platform lying,
 Now we cross the tumbling wave;
Shrieking, sickening, fainting, dying,
 Deed of shame for Britons brave.

(10) At the savage Captain's beck,
 Now like Brutes they make us prance;
 Smack the Cat about the Deck,
 And in scorn they bid us dance.

裸のまま横たえられ、海の長旅を強いられる船倉内では、叫ぶ者、病む者、死にゆく者たちで地獄さながらの様相を呈する。あるいは、鞭をもって奴隷を扱う船長は、家畜を弄ぶかのように彼らをいたぶる。

また、食事についても次のように悲惨な状況が描かれる。食事用の豆は傷んでおり、とても食せる代物ではない。それにもかかわらず、鞭の力によって奴隷たちは食べることを強要される。そして、劣悪な移送環境の結果、多くの仲間とともに Yamba の子供の命も奪われてしまった。

(11) Nauseous horse beans they bring nigh,

Sick and sad we cannot eat;

Cat must cure the Sulks they cry,

Down their throats we'll force the meat.

(12) I in groaning passed the night,

And did roll my aching head;

At the break of morning light,

My poor Child was cold and dead.

目的地にたどり着くまでかろうじて生き延びた者たちには、更なる試練が待ち受けていた。その運命は、商品として人身を買い取る Massa、すなわちご主人様の意向に支配されていた。Yamba を買い付けた主人は冷酷で、奴隷たちを全く人間扱いしない。炎天下の労働、鞭打ちによる仕置き、満足に与えられない食事など、人間が「労働」の名を借りた「拷問」にどれほど耐えられるか、あたかも人体実験するがごとくである。

結果、自らの境遇に絶望しきった Yamba は、海へ身を投じて命を絶つことを決心した。そのとき、偶然にも出会った英国人宣教師に彼女は救われるのであった。それは、肉体の死を防いだけだけではなく、絶望がもたらす精神的な死からも Yamba を救う結果となった。それは、Yamba がキリスト教に帰依することによって初めて可能となる。その宗教的無知が啓かれていくプロセスが、以下のように描かれている。

(23) Strait he pull'd me from the shore,

Bid me no self-murder do;

Talk'd of state when life is o'er,

All from Bible good and true.

(24) Then he led me to his Cot,

Sooth'd and pity'd all my woe;

Told me 'twas the Christian's lot

Much to suffer here below.

Yamba の改宗は、現世で課された過酷な運命こそが「キリスト教徒の宿命 “the Christian's lot”」であると理解させることから始められた。この観念の注入は、宣教師が聖書の物語を言い聞かせるという手法による。但し“Sooth'd and pity'd all my woe ” (25) とあるように、Yamba の悲しみに全面的に共感し、その辛さを理解することが大前提となる。Yamba に向けられた「共感」があってこそ、逆境を宿命とする「キリスト教徒の特権」が受け入れられたのである。こうして異教の民に「キリスト教徒」という称号が付与され、ここに「生まれ変わり」が完成するのであった。

しかしながら、この精神的再生は、異文化との折衝を経由するため、その人が持つ本来の価値判断は停止を余儀なくされる。その表れであり、Yamba 自身の戸惑いとも解釈できるのが、各スタンザの括弧内に示される「心の声」である。

(25) Told me then of God's dear Son,

(Strange and wond'rous is the story;)

What sad wrong to him was done,

Tho' he was the Lord of Glory.

(26) Told me too, like one who knew him,

(Can such love as this be true?)

How he died for them that slew him,

Died for wretched Yamba too.

Yamba は奇妙に思いながらも神の子キリストの物語に感銘を受け、聖なる存在ですら悪意の仕打ちを受ける運命にあることを知る。さらに、自らを滅ぼした相手の贖罪のために死すことの意味を、驚異の念とともに受け止めている。「奇妙だがすばらしい物語」や「信じがたい他者への愛情」への疑念は、Yamba 本来の価値観に基づく反応である。しかし、その疑念を無視せざるを得ないほど、肉体への責め苦は過酷であり、その苦痛の回避を可能にしてくれるキリスト教は魅力的に映る。直観を却下させるほどの魅力的な教えにより、Yamba は一種の洗脳を受けたのである。

さらに Yamba の変身は、自ら「苦痛の共感を受ける者」から「共感の慈悲を施す者」へと立場を変えたことで完了する。この転換は、以下のように一見ごく自然に進められる。

(28) Wicked deed full many a time

Sinful Yamba too hath done

But she wails to God her crime,

But she trusts his only Son.

(29) O ye slaves whom Massas beat,

Ye are stained with guilt within;

As ye hope for mercy sweet,

So forgive your Massas' sin.

上記の引用で特に注目すべきは、Yamba の自己理解に決定的な変節が生じていることである。キリスト教徒となった Yamba は、今や “Sinful Yamba” となった。そして、Yamba 自身も含め、奴隷こそが “stained with guilt within” すなわち「内なる罪で穢れている」との認識を持つに至る。これは、キリスト教の「原罪」の思想が根付いたことを示す。

さらには、人々の「原罪」がキリストによって赦されたのと同様に、罪深きご主人様の罪をも赦すべきであると諭される。もはや被害者としての奴隷ではなく、「原罪」を抱える同胞、すなわちご主人様へ隣人愛を施す立場に Yamba はいる。

このような伝道師のごとき無償の愛を抱く Yamba は、作品の最終盤において、祖国全体がキリスト教的思考を受容することを望むに至る。

(45) Thus where Yamba's native home,

Humble Hut of Rushes stood,

Oh if there should chance to roam

Some dear Missionary good;

(46) Thou in Afric's distant land,

Still shalt see the man I love;

Join him to the Christian band,

Guide his Soul to Realms above.

(47) There no Fiend again shall sever

Those whom God hath join'd and blest:

There they dwell with Him for ever,

There "the weary are at rest."

“Join him to the Christian band” と、祖国に残した夫もキリスト教徒になることを願う Yamba は、苦痛にさいなまれる奴隷ではない。これは、苦境すら救いに変えるキリスト教の神話構造に取り込まれた結果である。Yamba の変節は、予定調和的に用意されたキリスト教布教活動の目論見にかなうものである。*Cheap Repository Tracts* 自体が倫理教育を担っていたことを考えれば、納得のいく解釈となる。

しかしながら、ここで注目したいのは、植民地主義的他者支配に貢献するキリスト教の利用と、反奴隷貿易推進派としての More の姿勢の齟齬である。この二つの要素は果たして矛盾するものであるのだろうか。冒頭に提示した Piozzi 夫人による More への反感は、ここに見られる齟齬を指していたとも言える。More の奴隷貿易反対運動は、奴隷身分の解消を目指すものだったのか、あるいは宗教観の政治的利用に過ぎなかったのか。

さらに、キリスト教への帰依による Yamba の心境の変化に注目するならば、「共感」に支えられた「同情」と「贖罪」のプロセスが、最終的には奴隷身分の固定化に向かったことは見逃せない。結果的に宿命としての身分を受容させるという、奴隷存在を容認するメッセージをテキストが与えていることを十分承知しておくべきであろう。

IV

先の Yamba の物語では、彼女の救済の本質が、原罪が保障する「服従すべき身分」のイデオロギー作用にあることを考察した。いかにも福音派らしい、原罪の原理に基づく布教の典型が看取できる。保守派とも社会改革派とも言われた More の主張として相応しい内容である。

ここで、あらためて問いたいのは、奴隷貿易反対運動の本質は一体何であったのかということである。いくつもの不幸が Yamba の身に降りかかり、その根源は、金銭のために同胞を搾取する奴隷貿易にあることは間違いない。しかしながら、作中での Yamba の改宗により、結果的に奴隷貿易の非人道性が容認された点を鑑みれば、そこに「必要悪」が産出されたと解釈することができる。現実においても、奴隷貿易が帝国内全面廃止に至るまで約半世紀もの時間を要したように、「必要悪」としての奴隷貿易がいかに厄介な存在であったかは想像に難くない。

たとえば、この堅固な「必要悪」の存在を支えたものとして、Jeremy Bentham の思想の影響が考えられる。そもそも Bentham の思想は、英国の福祉国家としての土台をなす思想であり、万人への権利拡大を想定した社会主義的傾向を促すものである。かの有名な「最大多数の最大幸福」は、すべて「快樂」は「善」であり、「苦痛」は「悪」であるという極めて明快な原理を基礎とする。そのきっかけは、18世紀においてもなお混乱をきたしていた法制度の抜本的整備の必要性という現実的な問題にあった。合理的な法整備と社会秩序構築のために、Bentham は先の原則を導き出した。しかしながら、価値判断の基準を感情や感覚という主観的なものに求めたため、矛盾や判断不能を招く理論的不備に悩まされることになった。

その最大の難点は、個人の「最大幸福」と他者ないし集団の「最大幸福」とが阻害しあう可能性にある。そしてさらに深刻なのは、「快樂」肯定の原理が、個人的欲望の恣意性や他者を拒絶する自己中心性と紙一重であることである。「苦痛を避け、適正に快樂を求める原理」は、果たして個人の幸福と他者の幸福とをどのように推し量り、適正値を導き出せるのか。アダム・スミスの楽観論であれば、悪へと転じかねない自己中心性は、互い

を監視しあう「良心」により回避可能とされる。しかし、「快樂」や「苦痛」を判じる「感受性」はきわめて曖昧である。外界からの刺激を受容する能力を適正に行使する術については、不明確である。個の利益と公共の利益の理想的な配分は、依然として神の摂理によるのである。

1789年に刊行された Bentham の『道徳および立法の諸原理序説』では、次のような原理がうたわれる。民法上の刑罰施行の指針を提供するため、詳細な犯罪の分類が行われるが、ここで注目するのは、論の前半部分で示される人間の行動原理である。

まず「功利性の原理について」と題された第一章において、「自然は人類を苦痛と快樂という、二人の主権者の支配のもとにおいてきた。われわれが何をしなければならないかということを示し、またわれわれが何をしようかを決定するのは、ただ苦痛と快樂だけである」という大前提が紹介される。⁷

さらに、この功利性に基づきながら、個人と社会との関係が次のように説明されている。

III. By utility is meant that property in any object, whereby it tends to produce benefit, advantage, pleasure, good, or happiness, (all this in the present case comes to the same thing) or (what comes again to the same thing) to prevent the happening of mischief, pain, evil, or unhappiness to the party whose interest is considered: if that party be the community in general, then the happiness of the community: if a particular individual, then the happiness of that individual.

3 功利性とは、ある対象の性質であって、それによってその対象が、その利益が考慮されている当事者に、利益、便宜、快樂、善、または幸福（これらは現在の場合、すべて同じことになるのであるが）を生み出し、または、（これもまた同じことになるのだが）危害、苦痛、害悪または不幸が起こることを防止する傾向を持つものを意味する。ここでいう幸福とは、当事者が社会全体である場合には、社会の幸福のことであり、特定の個人である場合には、その個人の幸福のことである。

Bentham の言う「社会」とは個人の総体であり、共同体すなわち思想や利害などを共有する集団として扱う。場合によっては上流階級を示唆しかねない *society* という語は使用

せず、次のような定義を提示する。

The community is a fictitious body, composed of the individual persons who are considered as constituting as it were its *members*. The interest of the community then is, what?—the sum of the interests of the several members who compose it.

社会とは、いわばその成員を構成すると考えられる個々の人々から形成される、擬制的な団体である。それでは、社会の利益とはなんであろうか。それは社会を構成している個々の成員の利益の総計に他ならない。

しかして Bentham は、個人の幸福が社会全体の幸福となんら矛盾しないとの解釈を提出するのである。ここで最も注目すべきは、「擬制的な団体」という語の真意である。原文では ‘a fictitious body’ となるが、個人も社会も法律上の存在であることを断わる重要な言及である。企業組織を法人と見なすように、「社会」はレトリックとして存在するものである。このような解釈をするならば、More の作品が奴隷の身分を「必要悪」とみなしかねない言説となったことにも説明がつくのかも知れない。

すなわち、抽象的総体としての「社会」に貢献する「奴隷」も同様に fictitious な存在であり、奴隷貿易自体も社会システムに組み込まれた一要素に過ぎない。従って、*The Sorrow of Yamba* における身体的苦痛の描写や、それによって喚起される肉体感覚も、観念としての「苦痛」に過ぎない。「苦痛」への共感から始まり、「同情」から「贖罪」に至るプロセスをたどる、典型的な anti-slavery poems の語りの構造そのものが、fictitious な要素を帯びることを認識すべきであろう。

ゆえに、More の作品のみならず、1780年代以降の anti-slavery poems の評価については、「fictitious な奴隷」への共感という視点からあらためて読み解く必要があるのではないだろうか。このような視点を持ち合わせた場合、例えば Piozzi 夫人のような言葉の表層的な意味作用の幻惑により発生した「誤解」に、事実と言説とが反響しあう空間を察知することが可能となるであろう。またそのような場においてこそ、歴史とテキストとの意義深い交渉を垣間見ることができる。昨今の anti-slavery poems をめぐる盛んな研究状況を鑑みるにつけ、作品の表面的な位置づけや解釈に甘んじず、表象の乱反射をより包括的に捉ま

えられるアプローチの必要性を心得ておかねばならないと思われる。

注

- 1 作品の原文引用は The Norton Anthology of English Literature ; Norton Topics Online (http://www.wwnorton.com/college/english/nael/18century/topic_2/welcome.htm) からのものである。なお、これ以降の原文テキストにおける強調は、すべて筆者によるものである。
- 2 “Social and political stability, peace and order rested on a religious foundation and, More believed, it could rest on where else.” (Robert Hole ed. *Selected Writings of Hannah More*, Pickering and Chatto, 1996, p.xxv.)
- 3 More の原文テキストの引用は、*Tales for the Common People and Other Cheap Repository Tracts* (Trent Editions, 2002) によるものである。
- 4 原文テキストの引用は ed.Nick Rhodes, *William Cowper: Selected Poems* (Fyfieldbooks, 2003) による。
- 5 実際のテキストでは、[]内を除いたものになっているが、論旨の展開上、原文の最初と最後のスタンザにしか現れない部分を敢えて提示したものである。
- 6 執筆年代は1785年であるが、William Cowper, ed. Robert Southey, *Works* (15 vols, 1835 - 37) の第10巻に収められた作品である。
- 7 これ以降の Bentham の引用の和訳は、『世界の名著第38巻 ベンサム、J.S.ミル』（中央公論社）に収められた「道徳および立法の諸原理序説」における山下重一氏の翻訳によるものである。

参 考 文 献

- Cowper, William. *William Cowper: Selected Poems*. Ed. Nick Rhodes. (Fyfieldbooks, 2003)
- More, Hannah. *Tales for the Common People and Other Cheap Repository Tracts*. (Trent Editions, 2002)
- More, Hannah. *Selected Writings of Hannah More*. Robert Hole. Ed. (William Pickering, 1996)

Carey, Brycchan. *British Abolitionism and the Rhetoric of Sensibility: Writing, Sentiment, and Slavery, 1760–1807*. (Palgrave Macmillan, 2005)

Ellis, Markman. *The Politics of Sensibility: Race, Gender and Commerce in the Sentimental Novel*. (Cambridge UP, 1996)

McGann, Jerome. *The Poetics of Sensibility: A Revolution in Literary Style*. (Clarendon Press, 1996)

Roe, Nicholas, ed. *Romanticism: An Oxford Guide*. (Oxford UP, 2005)

Wu, Duncan, ed. *Romanticism: An Anthology*, third edition. (Blackwell Publishing, 2006)

Yonge, Charlotte M. *Hannah More*. (Dodo Press, 2008)

The Norton Anthology of English Literature; Norton Topics Online <http://www.wwnorton.com/college/english/nael/18century/topic_2/welcome.htm>

関嘉彦責任編集『世界の名著第38巻 ベンサム、J.S.ミル』(中央公論社、1981年)

寺中平治、大久保正健著『イギリス哲学の基本的問題』(研究社、2005年)

伊藤邦武責任編集『哲学の歴史第8巻 社会の哲学【18–20世紀】』(中央公論社、2007年)

ニュー・ファンタジーの会編『イギリス女優児童文学作家の系譜 翔くロビン』(透土社、1990年)